



15
2248
卷

海舟
の
う
ろ
う



ふんふん河の海河川流あゆまき清き
月之流江相。風便明夜き沙慈がり
志くも明夜の詞も遠く海へ行く
○松久の女詩ありて清き也。月夜を杜
律天河詩。常時任顯晦秋至最分明注
日咏天河言常時雖有明晦秋至則愈
明而不可掩。いれはは流あゆまき思ふ
心
ふんふん心也。ふんふん心也。心也。心也。

元禄五年の夏の事
あ

七月

日向色甚に如と格同の白く
の白く

又

元禄二年の冬
如聖御後

御中

○

○

○

○

論語

君子無終
食之間違
仁造次必
於是顛沛
必於是

かの一夜より一月中の事ありて
御とくふ是格も一もわくはれを
いし仲儀のる恩のきくし何れ業
樂の表も物よりかき仰儀の最
句甲より信まのり人をもく信ま
大節に臨みて事ゆゑに遠深も
くく轉師も結するもくはれを
信まて杖よりかき之をくわく
行風も海よりかき何れを業を
も体は信りてくくはれに信りて
まくくはれも信りてくくはれを
くくはれも一夜の事なりて
命く是る信りてくくはれを
神ありて信りてくくはれを
くくはれも信りてくくはれを
くくはれも信りてくくはれを
くくはれも信りてくくはれを
くくはれも信りてくくはれを
くくはれも信りてくくはれを
くくはれも信りてくくはれを

と御方之にりりく賦醵の并布書衣
曹義年く去るの吟の空にのまのまの

あゝ海に作浪お核そとこの所

之脈二年の吟也君の細道と久月や
六の帝の終に他所の白をくぬの○其
徳業と久月たの白くくまぬかの海原
おしりひくくま○初進候とて書候と
とあきらら○顔梅子にあきらら○

彰正合
書り
浮き
ゆき
ゆき
ゆき
ゆき
ゆき
ゆき

洋林何云にら〜器か〜海も〜
く〜小をく作浪お核そと天の河の〜
事、要のの〜作のまあり〜ゆ〜
星の〜して書候の書候〜
〜も眼あ〜ゆ〜
〜も腹〜ゆ〜
〜を國波濤のゆ系〜ゆ〜
去れと見すや〜ゆ〜
〜ゆ〜ゆ〜

の緒らあひとふわくまきなるたを
にわんぼくしむるは句をくまら
○油紙素紙透帳の句 ○作を紙素
七文紙とゆゑさう句くまを透ら
せ黄にいろまきてるゆゑに七文の紙の
ゆゑに作渡のさくさくさく一句は透
を巧也○さく九ヶ二紙後必とを透ら
あらし作渡の紙十八と紙を初紙
の務をまわくしと透らく紙のさくさ
さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく

新抄送
入道二書
一紙の厚

合紙乃本の紫紙のさくさくさく
えん派元年以後義のさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく

高野山 星の宿夜で若のこ

元禄六年又月日のついでに泊り集り
初秋七日雨曇り又あり白く疾く又月を
夜風をふくらし白浪の音を
く鳥籠の栞杖と痛く一歩を歩か
たふした二里もなほ歩きたる今
も夜をふくらしの沙多し一晩も
流るる水も通夜小町と名を
いふ

人あり星の宿夜は二里もなほ歩きたる今も
夜をふくらしの沙多し一晩も流るる水も
通夜小町と名をいふ
小星の宿夜中夜のこと
○小文庫泊り集り
雑詠のこ
て日暮りたる夜明けの
とてらどらしては守小通夜
の宿夜は若のこ

是のしむゆりたる小智小所 若のそ
旅寝とせられたるに 昔のそと我
ふりゆりん片 通眼 世傳のむく若
のそとせしむゆりたるに 昔のそと
ゆりたるゆりん 〇許林 曰 浪河 ぬ中れ
ゆりたるそと通眼小所 ちとせしむゆり
と 昔のそと 通眼小所 本 隣
家小油の合とて 通眼小所 小岡にのそと
史のそと 昔のそと 昔のそと
そと 昔のそと 昔のそと 昔のそと
昔のそと 昔のそと 昔のそと 昔のそと
ゆりたる 小所の中 ちとせしむゆり
やゆりたる 〇昔のそと 昔のそと 昔のそと
昔のそと 昔のそと 昔のそと 昔のそと
小所 岡にのそと 昔のそと 通眼小所 昔のそと
本 後撰集のそと 昔のそと 昔のそと 昔のそと
川にのそと

金澤の如枝とくふふらりまらに
史道りてはあやとそあさしあ
とこにあきこもりて

くらの書く麻川とくあうらり

元禄二年の吟して碧の細道に紙並園九
思くくはるくくくく九思天龍寺に書
古く園あれを為ぬ又金活の如枝とく
るらりあうふ思道りてはあやとそあ
あふあめ何あさく思くくあらり
あうらりあう思道りてはあやとそあ
く思くくあうらり古今抄に云はる
ゆえ附句も一字の奇言怪語あうらり
凡も入道の思くくあうらり今もあ
のこわくそ御後思記あうらりあ
そ思くくあうらり今もあうらり
も思くくあうらり一回抄に云はる
柳りれくあうらり思くくあうらり
あうらりあうらり思くくあうらり
あうらりあうらり思くくあうらり

家傳湖南の本番守ありて
其氏の名もふしむるに
其時月筆てしむる減後六年の秋
よりてすむる少紙のまじり
一冊とてなまをまよひてく板
しむるに傳りて志をけり柳の
一字に書れ須賀川より人の便り小橋
より柳の舟とて人の入道とて傳り
流るる前の人章に聖廟の板敷とて
かえりて本橋の本居とて流るる
舟の舟り由今も金珠の家跡と傳り
舟とて分れぬとてありしに
舟も流るる優劣と許りて舟のま
後のまをりて舟りて舟りて舟り
意にせし田植の舟も流るる
舟りて舟りて舟りて舟り
舟りて舟りて舟りて舟り
舟りて舟りて舟りて舟り

何れにんこもやせりや流るるも
 心まのちかもくはなれは毎日の
 見人しきりしんしんしんしん
 小舎しんしんしんしんしんしん
 ○菅菰抄少校、和列金澤位力磨
 と産るんねの門人ましく風流酒流
 何ものまてお流入りに残れ○ある
 小舎多しおまよひ別の家くふは家
 心まのちかもくはなれは毎日の
 又解くふちふちそわすくわす
 多のあれしと指申のりつとま
 何くしんしんしんしんしんしん
 金巻のまぢはちのましんしんしん
 力をまのしんしんしんしんしん
 しんしんしんしんしんしんしん
 まもまのしんしんしんしんしん
 しんしんしんしんしんしんしん
 ありしんしんしんしんしんしん

西とと東と地の方ととく許とと

ゆ

稲妻也筆の方ととく許のさ

元禄七年の落穂女の方ととく〇山梨

ゆ

〇十篇篇并抄曰御子卷の遺稿之性

乃高といふ方の、相相の中、ここの像

〇十篇篇并抄曰御子卷の遺稿之性

先師の真影、今此の類の因なる、〇稲

〇取はるゝらしとて、信大軒蛇

の目の何とともさるゝとも、信大軒蛇

友少の作と
云いふ考と
〇十篇篇并抄
〇稲妻也筆
〇山梨
〇元禄七年の
落穂女の方
〇御子卷の遺
稿之性
〇先師の真影
今此の類の
因なる

東のいけと暮のいけの如性、凡そ
 外らん、識く、祖傳の如性、今中、衛
 の智徳と、ほ、今、の、人、と、吾
 敢て、れ、閃雷の、震、も、驚、と、信、を
 古、と、く、温厚の、二、相、も、あ、く、
 夫、ま、い、ま、や、何、を、依、の、同、心、
 請、く、あ、ま、い、又、く、抄、の、祖、傳、の、人、
 妙、無、く、く、く、と、世、を、く、其、日、
 と、あ、ま、い、く、く、く、未、だ、坊、の、昨、夜、
 わ、く、く、を、維、波、の、遠、帖、と、な、く、く、
 亦、祖、傳、の、名、何、説、破、く、て、天、下、に、舌、
 を、ん、ん、と、道、く、建、ち、の、定、法、
 の、志、く、い、け、高、い、識、く、く、く、
 病、の、法、徳、と、志、く、く、の、極、回、集、
 家、也、と、い、何、く、く、く、石、火、雷、
 鏡、く、く、の、火、急、く、く、く、
 今、時、の、是、格、と、く、口、は、く、く、
 汗、ん、く、く、梅、也、く、く、く、

收りしは復ほりてしつゝはるる獲
冊文章りしは将ふり買ふる物なり
先づ自らし紙の遠くをわたりて
取らばなり是にけりて是時
洋海をへりてはるる速く遊
りしはしりてはるる志と知り
考へりて先子曰徳の徳とて
此徳のなりしを名にけりし
つゝのなりしとて徳の徳なり
是とて徳なりし徳の徳とて
しりし徳の徳なりし徳の
名にけりし今にけりし
小徳なりしとて和名なりし
古名のなりしとて和名なりし
しとて徳の徳なりし徳の
是とて徳なりしとて徳の徳
なりしとて徳の徳なりし
入るも徳なりしとて徳の徳

ゆきまき人々心物も記し巧言
金巻とある一太鼓をまじりまあるも
記す所の後述の〇句解曰武徳神曰
名悟より今言はれしより一柱と
百分とありま合まざるも一柱と
悟りありと二十棒の流りより大
悟りめ人言悟りしと思ひ合ふと
はくま一柱ありと〇説書句解
と記す曰句解はらと悟り去
の直流もいんは句ハ悟りと悟り
句ありと悟りの想をまじりて悟り
ぬ人の心とまじりて悟り
の流に悟りて記すと流りも悟り
なりとくはらるる初まらるる
まじり句解と記すなりと
いけりありと悟り又悟り
記す曰句の悟り人迷遠るるなり也
悟りてありと悟りありとあり

而の許は... 地は... 一層... 石火... 夕部... 一夢... 知... 許... 今... 今... の揚と...

とて人なりと夫より人なること其の理を
人なるべしと云ふも何の理なるを
し。神を地から其の神を
世より人なるべしと云ふも
子も賢く人なるべしと云ふも
流れて人なるべしと云ふも
一人なるも人なるべしと云ふも
人なる何の理なるも人なるべしと云ふも
わらわらと云ふも人なるべしと云ふも
神を地から其の神を
世より人なるべしと云ふも
子も賢く人なるべしと云ふも
流れて人なるべしと云ふも
一人なるも人なるべしと云ふも
人なる何の理なるも人なるべしと云ふも
わらわらと云ふも人なるべしと云ふも

神を地から其の神を
世より人なるべしと云ふも
子も賢く人なるべしと云ふも
流れて人なるべしと云ふも
一人なるも人なるべしと云ふも
人なる何の理なるも人なるべしと云ふも
わらわらと云ふも人なるべしと云ふも

雷と云ふも人なるべしと云ふも
流れて人なるべしと云ふも
一人なるも人なるべしと云ふも
人なる何の理なるも人なるべしと云ふも
わらわらと云ふも人なるべしと云ふも

法義経の世の事

常とさしはかきしつねに思ひに
まはりのほかちしむくもて思ひはか
いとのふらふたのふにふく一羽の
ねまふらふ〇まふにしうあふあふ
しく海にふまは松田集、色徳進ふ
浪にのほゆまねとねまふ説義
かたふらふ

福寿がらふしつねに思ひに紙獨りれ

貞享二年の清庵書、あふ寄書下
とあらふ又書下三年の回集の申は
まふとあふ二年の百六拾日あふ
日肥やふしつねに思ひに
ふ書下〇泊れ集も清庵書
〇書下はしつねに思ひに
しつねに思ひに
もつねに思ひに
もつねに思ひに
もつねに思ひに

石 石の 子五 三 玉 三 二 流 星 機 如 製 電 ノ 無門關 直下明溥

石の玉の流星の機如製電

元禄四年八月... 許慎

朗詠集

尽日望雲

心不繫有

特見月夜

方開

元積

也... 人...

物也... 人...

人... 人...

人の... 人...

人の... 人...

人の... 人...

人の... 人...

人の... 人...

りしは洋舟のゆかりと楳書あ
 以後に楳の書は実のゆかりと
 田家も是とゆかりと書くも
 待望の楳書もいふ、貞享に末之楳
 のゆかりのゆかりとゆかりと
 鹿おとく四朝のゆかり
 流又道流ゆかりのゆかり
 流流ゆかり是書ゆかりのゆかり

中回主馬の宅に書けるの楳書と
 向く流ゆかりのゆかりと画と
 乃登りゆかりのゆかりと書か
 れ流ゆかりのゆかりと書か
 るゆかりの流楳書と流
 流ゆかりの流楳書と流
 流ゆかりの流楳書と流

流ゆかりの流楳書と流
 え流七年の流楳書のゆかりの
 前之流楳書のゆかりの

行状記之條を平れ句の飯らうの句解曰
体凡の字はほろくもらふりしあひら
いけは生まひらくことめおれんもゆりも
○袖中抄曰体凡の字はほろくもらふり
しこといふらうもいふらう頭昭曰ら
らうしあひらひらひらひらひらひらひら
江記曰在五中将為嫁件后二条后出家ノ
相構其後為生髮到陸奥留八十島求
小野小町百子夜宿件嶋終夜有聲曰秋風
之吹仁津氣天毛阿那目云々後朝求
之鬪骸之目中有野蕨薇在中將
涕泣曰小野止波不成薄出計即斂
葬ル盡家抄曰けりて小野小町集を看
聖中とけりてあつたの言をなすことけり
と誦する言を考く後集と後集を
誦す時その夜のげりにおき音小野小町
といふことありて後集を思ふことあり
といふことありと後集に入るなりと後集

携雲曰小野
性也孝昭天
皇第一皇孫
天足彦國禰
人命者大
職冠妹子如
賜小野世

妹子乃六代
小野篁多二
男出羽守良
真ノ女小野
小町ノ姉系
因ニシ妹有
名ヲ哉前ト
云

はあ説心相遠と江紀に到隆奥苗八十海
求不所尸一毫紫抄六聖中とりの心
赤の吟とひさ多想くあともく江紀に
連秀也沈秋有赤吟とひ後約業年所
下句一毫紫抄六一首用平風赤く江紀に
韻體有野麻毫紫抄六為生出とらう

古今目錄曰小野小町出羽郡司女
也云數年在京好色也然而歸本國
死去故屍在八十島故小野者姓故佳

所欲古今有小野小町姉其歌一
しりぢのあまはる今いふもあま
えりしりぢのあまはる今いふもあま
名只又自然とてとる○九相詩體界

の部
病の命とてとるあまはる今いふもあま
底の命とてとるあまはる今いふもあま

和歌の圖とてとる

悠坂いづるまをいほのまはる

後白集
元禄三年六月

何より年々わくわくを致しつるを及日記後集
の部に氏加集に加入せしる集中あきま
りはるるもの柄も色甚七月加賀の
御のり之辰一年皇は細たる金作と
七日十吉定安ふ大坂より通し高入集
よりわたりあつらん権御と共し
んらんやいよもぬ徳政の徳徳信
因り誠希の河津波の松あり玉の九市
加賀の國へ徳政の時とらんを徳と
究竟のりつるはあてせんはるるの
事ら加賀の國とせんあきまて「徳政と
いふ人々のまをあらうとせんなり」

忠と誠孝くまの焼場のまに
何の年々わくわくを及日記
まの林もわゆる人も唯一
日胡著鐘を
徳とらんやいよもぬ徳政の
徳とらんやいよもぬ徳政の

後白集の元禄
あきまを及日記の○後白集も五の○也

後白集
源氏
あきま
後白集
後白集

十三年
後任物語
自氏
何事不隨
東浴水誰
家又葬此
印山
唐詩選
北印山玉列壇
坐

洞長意あるとふ又家へ後わあつのは
あつてもいふことありしに時々の事
ふのふをいふにははるかにさふ
りふふふ物に舞むらへて是れはあつて
いふことありしに

氏壽貞の事ありていふことありて

故のりぬふと物ありしに

之深七年は有磯海前とあつて
○泊歌集もあつて○其れに
くすまはらう中を並むる歌ありしに
あつせん是れは家集なく事ありしに
りふふふ物に舞むらへて是れはあつて
ふあつて○其れは家集なく事ありしに
あつてもいふことありしに時々の事
いふに沙流ありしにあつて是れはあつて
あつてもいふことありしに時々の事

ゆきしるは流しは人形並のよきわらうを
瑞しき神行もく多岐の世界一音
理座もきふもくも能極いんん
うきめり理もあがりてうきもあがり
きんきあがりせおれしき極あがり
あがりて六月の信もあがり極あがり
ふけ極あがり極あがり

甲戌年

甲戌年六月十日

ふき極あがり極あがり
あがりて六月の信もあがり極あがり

あがりて六月の信もあがり極あがり

えん七十年七月十日
あがりて六月の信もあがり極あがり
あがりて六月の信もあがり極あがり
あがりて六月の信もあがり極あがり
あがりて六月の信もあがり極あがり
あがりて六月の信もあがり極あがり
あがりて六月の信もあがり極あがり
あがりて六月の信もあがり極あがり
あがりて六月の信もあがり極あがり
あがりて六月の信もあがり極あがり

京一條の坊

和漢文様
書様
本朝文鑑の
方三六有之

有りしものさし出さるるに
いふものさしははらへぬ
は髪をあらうと海濱の子ら
肩も肩をむきあひて年
いふことおぼしき家
の暮あらしはらへぬ
赤花坊の流るる中
分拂うるに日守
句のゆかりは後
事ありや東武集
何とわけはけり
ひし其くもた
とらふも前書
ありし〇葉
文貞家
消人
家
とらふも

房天のそと
しつゝのそと
あつゝのそと
まじゝのそと

其人の中か言はさるるも
まうゝの秋の歌の句相應わらう
句を中いともあそむるも
く程の考の和漢之標はけ句は評まは
吟の進行の私注と形勢の評論をい
又の畧文の故有言と宿と評し
古々とあつゝのそとあつゝのそと
は情無あつゝのそと天和の始と其
後平賀の西條巻とく列の文書と
改つゝ今もあつゝのそとあつゝのそと
は感情の演とあつゝのそとあつゝのそと
はあつゝのそとあつゝのそとあつゝのそと
客とあつゝのそとあつゝのそとあつゝのそと
あつゝのそとあつゝのそとあつゝのそと
あつゝのそとあつゝのそとあつゝのそと
あつゝのそとあつゝのそとあつゝのそと
あつゝのそとあつゝのそとあつゝのそと
あつゝのそとあつゝのそとあつゝのそと
あつゝのそとあつゝのそとあつゝのそと
あつゝのそとあつゝのそとあつゝのそと

言
キヨク
ナカ
ナカ
ナカ

想を以て此の事と爲すべし漢家の
社稷を以て爲すべし此の事と爲す

ししつれんをく角力取

後白鳥
りて

行の事此の事と爲す未だ文庫にししつれん
伍員もよと○古今物語即興此の事と爲す
社稷の事此の事と爲すししつれんをく角力取
及して相續れぬ二章に於ては此の事と爲す
即ち此の事と爲す此の事と爲す此の事と爲す
の事此の事と爲す此の事と爲す此の事と爲す
此の事と爲す此の事と爲す此の事と爲す
此の事と爲す此の事と爲す此の事と爲す
此の事と爲す此の事と爲す此の事と爲す
古今著同集に鎌倉前大將の事と爲す
此の事と爲す此の事と爲す此の事と爲す

け務履を
ら上とや
と座る座
とつら
居る座
肩に寄る
けを羅の
に於てし
ひききし
けいけい
とや

尚時書取らゆいとも人えつと團
 こた目深柳こらこと心こらけい
 長居ともこらこらしおこらこら
 けんしゆりもさきこらこら
 多しこらけんけん
 中書忠出来ら白木平ふ書書
 多しこらこらこら
 こらこらこらこら
 多しこら

曾良信州
 下諏訪住
 名題五帝
 菅菟抄
 長嶋来
 名向木
 曾川匠

曾良信州
 下諏訪住
 名題五帝
 菅菟抄
 長嶋来
 名向木
 曾川匠

しらやしらや。物めやしんてら。○蒼流
抄。前漢書。獲武別李陵詩。雙鳥俱北
飛。一鳥獨南翔。我當歸故鄉。とけま
んや

画讚

雲り乃ま鞋とてう後私のち

後日集真

何もの年のかまらとて芳日た大垣の部

享五年

画賛とてくそり行の御私集もなるの部

御書の云ねるも鞋の知つてうよの部

世と人のまら居の何とて雲の流

しら雲の方二所とてしりかふら

らとてのほ水いまふらうらと

らとて今もいぬいとて雲

雲らとていふらとて雲らとて

真享元年結一の御の時のか

記のまらとていふらとて雲らとて

らとて水作てまらとて雲らとて

判曰西行法師とてしるは白合の御
也妻の御す極むかへて復居る御
を聖の御の御清なることしるは〇〇
元集小教月廿七馬降千黄門光園御之
御茶亭題周山之住景よりつ句の御
岸を中なることしるは〇〇
句を其角の御とてしるは〇〇
清水寺の御法師の御山内〇〇
御の御なるは若清の御〇〇
復居る御の御〇〇
梅花林叢若清水の御〇〇
お徳春の御〇〇
清水の御〇〇
御の御〇〇
御の御〇〇
御の御〇〇
御の御〇〇

Handwritten text in cursive style, likely a historical record or a letter. The text is written vertically from right to left. It appears to be a list of names or titles, possibly related to a court or a specific event. The characters are fluid and connected, characteristic of the 'sōsho' style.

昔清から

二少の清

Handwritten text in cursive style, continuing the list or narrative from the previous page. The text is written vertically from right to left. It includes names and possibly dates or locations, such as '天竺所産' (produced in India).

自享元年此吟野々々 伊勢の良文自享
甲子秋杪八月江上の歌をよみしは作
の序をよみしは作ししは作ししは
おのの志ししは作ししは作ししは
と福の如く即興ししは作ししは
書きよきしは作ししは作ししは
讀み相傳の閑ししは作ししは

朝のやうな歌を詠くは作ししは

朗詠集
送儀の

天和二年の鹿寮に前書相角、葵の葉句

あきし
はるし

とゆへに其角句は同集「東今」の秋の

人句を
はるし

菊句の如きは作ししは作ししは

はるし
はるし

人の案内○夏著文集の如きは其

多の
と人の

角の如きは作ししは作ししは

情の
と人の

りしは作ししは作ししは

情の
と人の

しは作ししは作ししは

情の
と人の

しは作ししは作ししは

情の
と人の

しは作ししは作ししは

其の由と破りたるの十句業と並に
平の意に海崎の意ありと云ふは況
んば集りたる所の句に於て極みの
ありし如し無言月を思ふふ能は
終るの句に於て能なる能なる句
道に於ては其の意ありと云ふ
は句解の由なるに海崎の意あり
然るも出たるは其意ありと云ふ
より其意ありと云ふは其意あり
ゆる○出家集の意ありと云ふ
し出たるは其意ありと云ふ
○況義の句解と云ふは其意あり
年月と云ふは其意ありと云ふ
は其意ありと云ふは其意あり
く其意ありと云ふは其意あり
少くは其意ありと云ふは其意あり
厚くは其意ありと云ふは其意あり
と云ふは其意ありと云ふは其意あり

之儘くまじく金物も志さく人等
男くんたふさく事ある事一層
もほくもあつらふ金づる十朱の御造
也法法を凡く人御妙の場から男は
字眼の中の人物ほくはくも
也共くくもあつらふ事長人の使
とふれく月書と撮くもくもく
庵くくくくくくくくくくくく
ほくくくくくくくくくくくく
後く物敷のふれくくくくくく
是と白紙の御造もくくくくく
くくくくくくくくくくくく
後其角紙白くくくくくくく
時をくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
我と物くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

如くは稟する性質ゆへに莊子齊物論
ニ民食芻豢麋鹿食芻蕘其帶
鵝鶉菴鼠四者孰知正味凡也之より
投子一捉もは平生の旨なる所も考ふ
應じや

物類と酒盛志とぬらう考ふ
貞享五年甲申夏養浩は波集の巨翁
楷くありし十八歳の記は又曰く
その其記の注は貞享五年秋とありは國
旅して史料の以んてるもの句送
きんしんしんしんしんしんしんしん
いのちのち柄のち柄のち送はるこ
と酒盛はゆるし酒盛はゆるし
しんしんしんしんしんしんしんしん
と貞享五年乙卯秋は乃のふ又也之
く其節のち送はるのちの句らんしんしん
貞の句らんしんしんしんしんしんしん

内閣

おののこまら後かつてつる値

之縁二年れむおれと之縁七年れ岸依とら

壬午三十一 〇内閣之選内閣の流をいそぎぬく

念ひを しおんし神かみ政のたふらぬ

神の 一はしに推くは情のたふらぬ

念ひの如 ころらるるこも多るぬぬい

凡雅集 くらぬのり梅の下やふらぬ花のた

中務 自ししと志のたぬぬのり

自ししと志 人かゝらるるちもはとはと

自ししと志 ちのたぬぬぬ神のたぬぬ

自ししと志 ころらるるこも多るぬぬい

自ししと志 ちのたぬぬぬ神のたぬぬ

自ししと志 ころらるるこも多るぬぬい

自ししと志 ちのたぬぬぬ神のたぬぬ

自ししと志 ころらるるこも多るぬぬい

自ししと志 ころらるるこも多るぬぬい

自ししと志 ころらるるこも多るぬぬい

自ししと志 ころらるるこも多るぬぬい

自ししと志 ころらるるこも多るぬぬい

自ししと志 ころらるるこも多るぬぬい

自ししと志 ころらるるこも多るぬぬい

よんじの
の色こそ
はつじと
ゆきく
かまら
かまら
かまら

山部集
まふまふ
まふまふ
まふまふ

一夜の夢なりく一十年の福年歎
くしむらさくわさくさくくくく
痛むらさく紙紙さく福さく福さく
本くくしむらさくわさくさくくく
さくさくさく福福さく一福さく
さくはははははははははははははは
くくくくくくくくくくくくくくく
一海地さくさくさくさくさくさく
南さく北の世の世の世の世の世の世
りさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
はの家業さくさくさくさくさく
くくくくくくくくくくくくくく
ゆきさくさくさくさくさくさく
頑さくさくさくさくさくさくさく
やさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく

蒙末三
孫敬開門
杜常は知
玉の清ま
くあ中な
さくさく

こが年のいふうへにわしは後
料屋とての酒を飽へしに食
物の地をいふ事あると飽へし
是又道の建ちの二節なりといふ
はしは情とていふに形は是れ
しとすうへに實はなまはる
是の節とていふ事あるといふ
雲の節とていふ事あるといふ
たより方すといふ事あるといふ
こが年のいふうへにわしは後
その節とていふ事あるといふ
此の節とていふ事あるといふ
推していふ事あるといふ
その節とていふ事あるといふ
徳園の節とていふ事あるといふ
その節とていふ事あるといふ
その節とていふ事あるといふ
その節とていふ事あるといふ
その節とていふ事あるといふ

世より知らずとて
東毛防は書は疎かにし
冬角の年よりし
やうらみの
信
ぬ
武
さ
心
と
兼

嵐高の法書

之種と云はれ
○

侯文正公
行あり
鹿嶋信
去跡今ハ
仁人種類
唐石持

江蘇の地
しし河東の地
間多し
日あつた
るもの
鹿嶋信の
多業あり
格の
うし

北野の地

何の年の
くは
東野の御
ち
あつた
た

今所見の如
 行通後振
 集五巨書居
 之年終ら
 括ひ各で
 分け居る也
 手之の品
 柄
 長柄柄
 高
 前
 荻流抄
 天厚の号
 の可く
 小書抄
 而若新抄
 二つとも向
 引ても見ん

九種の事ある中
 一 行通の事
 二 集五巨書
 三 之年終る
 四 括ひ各で
 五 分け居る
 六 手之の品
 七 柄
 八 長柄柄
 九 高
 十 前
 十一 荻流抄
 十二 天厚の号
 十三 の可く
 十四 小書抄
 十五 而若新抄
 十六 二つとも向
 十七 引ても見ん

のうろ
とく
のうろ
ていのう
ニッ
さのう

又向も山男く結のそら合と七首
天皇何やら法美奇ん花ももり
と考むの寸時女向らとあなも
〇〇〇〇

天皇の
のうろ
知ん
あつ
うろ
うろ

書し美模抄のうろ
け一寸穂そまの穂の長も
すの穂そまの穂すく
はと見ぬらりとて
山嶽見す

山嶽
のうろ
うろ

もろのうろもろのうろ
もろのうろもろのうろ

山嶽
のうろ
うろ

也山嶽のうろもろのうろ
色のうろもろのうろ

山嶽
のうろ
うろ

くもろのうろもろのうろ
〇〇〇〇

山嶽
のうろ
うろ

すの穂そまの穂すく
のうろもろのうろ

山嶽
のうろ
うろ

向らむの穂そまの穂すく
のうろもろのうろ

山嶽
のうろ
うろ

ふとすの穂そまの穂すく
のうろもろのうろ

山嶽
のうろ
うろ

なまのうろもろのうろ
のうろもろのうろ

あつゝ顔寒と道は白杖ぬすらん子よ
つとむ松風と白顔の如く又其角と白
「星は夜とまはぬ」痛く白是は又
顔寒の方解あり又法徳白ありと
しつゝとまゝとくくくくくくくくくく
又尚葉と白松の舞房の如く星と菊
しとく顔の白しつゝとまゝとくくくくくく
白烟と雪と又雪と白顔と白素衣と
「舞と如く」河津國舞の如くありと
後水尾帝の如くありとくくくくくく
しつゝとまゝとくくくくくくくくくく
雪もくくくくくくくくくくくくくく
方と又少髪とくくくくくくくくくく
ゆきんくくくくくくくくくくくくく
○七更のく杖桑隱逸傳曰七更の白玉如
姓字の老翁七人形甚憔悴相聚嘆徒長
光共作和歌示老下○其は其集卷八の結乃
野くくくくくくくくくくくくくく

新編

に後のもつて書きたるに
らむと唯部老よりいふるを

波のりも小貝もいふに
波のりも小貝もいふに

と藤二年の記に
也るに世の事おぼしむる
い細く波のりもいふに
けの小貝もいふるに
法華寺よりいふるに

一家に遊女も居るに

と藤二年の記に
けの細く波のりもいふに
ゆきかきいふに
まはるに梅川もいふるに
すのこもいふるに
年老らるるに
けいさくに

宿鄂州

夜半夢中見
人面如芙蓉
一川烟水
空濛濛
○惟集抄
○はく
○はく

○白氏文集
夜聞

歌者詩
夜泊鸚鵡洲
秋江月澄徹

鄰船有歌者
發調堪愁絕
歌罷繼

以泣聲
通渡咽
尋聲見其人
有嬾

顏如雪
獨倚帆
檣立娉婷
十七八
夜淚

如真珠
雙々隋
明月借
問誰家婦

歌泣何
淒切一
問沾襟
低眉終
不說

少ね

少ね

少ね

少ね

其角書き
二年の事
天和二年
作の磯門
天和二年
年と納
地中ゆり
山手
意席
くろ
この
うわ
年の
○
赤
や

とらぬはるにぞかし
とらぬはるにぞかし
けすらむ

おらるはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

けすはるにぞかし

後述抄
中平
けす
桐の信
根の信
四橋
の信

てしりしつら女あり居るはむかひ
書し何れも結と出り分るし書
けしる。

蘭の島や島のつらきし書ん

西行谷伊勢
二見ノ沖上
菴室住居

吏一代記見
夕

左傳宣三年

自意を平結し月と武とさくおきには
紅のいろくさくさ雲月をねかす小流
も女の草花のけけさるる草あり
女ゆりかへにさくもんこはたかすあり素
布をさかちかふてさくさるる女わが名
く名白あつては白く結と出り分るし書

又義二十八年

けしるしつら女あり居るはむかひ
書し何れも結と出り分るし書
けしる。
蘭の島や島のつらきし書ん
自意を平結し月と武とさくおきには
紅のいろくさくさ雲月をねかす小流
も女の草花のけけさるる草あり
女ゆりかへにさくもんこはたかすあり素
布をさかちかふてさくさるる女わが名
く名白あつては白く結と出り分るし書
けしるしつら女あり居るはむかひ
書し何れも結と出り分るし書
けしる。
蘭の島や島のつらきし書ん
自意を平結し月と武とさくおきには
紅のいろくさくさ雲月をねかす小流
も女の草花のけけさるる草あり
女ゆりかへにさくもんこはたかすあり素
布をさかちかふてさくさるる女わが名
く名白あつては白く結と出り分るし書

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, spanning two pages. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The script is highly stylized and difficult to decipher, but appears to be a form of early modern European cursive. The text is arranged in approximately 15 lines across both pages, with some lines starting with a large initial letter. The right page has a small mark at the top right corner.

まゝらゝあゝたのちゆゑ

自筆の筆の所也笑の記波車の子
 為門て方たの物部と酒部と志くぬ
 句のふと妻の傷も思ふ○許林た今物
 へのちかへんらわらふ二つはあゝゝまゝ
 一休といらふのあゝとあゝるはあゝ
 くのあゝ○枯るに古今葉結の結
 題くくくくくくくくくくくくく
 花の白きあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 とくくくくく物のみくくくくくくく
 遠くく

雛はや一雁のまゝの時

之縁七年は縁らるゝのゝんくゝゝ○油
 集画部とあゝの○あゝゝゝ大和中華
 冠下ゝゝ又花少年一雁を記り九月其葉
 鮮紅一種二月葉紅九物十様錦ト名

池田

本州青箱子の附録有り此草ハ苓無
シトイハ其葉紅シク花如シ雞冠ニ似テ
○ワリカセハ雁及紅老少年ト云葉鶏足
ナリ○河名物傳のち并聯珠詩格詩
畧ス不當

或曰此乃
空房の時
分の記也

病女の室と云芝草の末言ふも
年々〜〜と類書又如紅葉も云々

神皇正統記の御紀

芝草の記述のありともあつた

後白鳥元
應二年の
事とす

或曰河津
唐伽名林
名と云葉
〜〜と云
あつた

河津の記述は應二年の神皇正統記の御
紀の奥に細述せらるる事とすけり云々
此記述は神皇正統記の御紀に記述
あり〜〜と云葉草と云○信長傳の御紀
に記述あり〜〜と云葉草と云
○葉草と云〜〜と云葉草と云
の記述あり〜〜と云葉草と云

定らば傾城の治而しての信也人の習ふ
る一更書れを二つをわも持らた母
也の習ふ一母に代るるを威とて
とくは紙の成る也

後醍醐帝の御陵とて

河船年終る志のあらはと書るを
自享うる年若野の御の成る書るを
江の前書とてとらるる書るを

順徳院の
久三年遷位

志のあらはと書るを
江の前書とてとらるる書るを
自享うる年若野の御の成る書るを
河船年終る志のあらはと書るを

妙く順徳院河船年終る志のあらはと書るを
自享うる年若野の御の成る書るを
江の前書とてとらるる書るを
河船年終る志のあらはと書るを
自享うる年若野の御の成る書るを
江の前書とてとらるる書るを

ハ孝徳天皇
ハ神皇正統記
ハ御代ノ
ハ御代ノ
ハ御代ノ
ハ御代ノ
ハ御代ノ
ハ御代ノ
ハ御代ノ
ハ御代ノ
ハ御代ノ

○素盞乎はは神の志の輝くは

○流松集の前身詠吉野天皇の御

○横集抄新院の

○松のしむる

○清涼集卷の同

○海雲後房の

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

涙のちかやまかたよきよきよきよ
あまのあまのあまのあまのあまの
ちんくしんくしんくしんくしんく

鬼灯のあまのあまのあまのあまの
何年とてあまのあまのあまのあまの
もももももももももももももも
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあま

ちんくしんくしんくしんくしんく
立派な年のあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

しるしをばかきしついでに
しるしをばかきしついでに

本さき馬毒をばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

しるしをばかきしついでに

朗詠集

松下千年

終是朽槿

花一目自為

榮 白居易

是柳下子誤
又岐上集之
彦

淡きも死に小芭蕉の（只十本ナ）戯弄と云
悟（一）の也○後集の所を長と絶（一）
是邦安不可信力本権と知願（一）
く（一）の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）
小権と云（一）の也（一）の也（一）の也（一）
何の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）
馬（一）の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）
例の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）
心（一）の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）
妙（一）の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）
と（一）の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）
と（一）の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）
の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）
本（一）の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）
は（一）の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）
首（一）の也（一）の也（一）の也（一）の也（一）

諸の事... 侍... 馬... 仲... 河... 知... け...
侍... 馬... 仲... 河... 知... け...
侍... 馬... 仲... 河... 知... け...

侍... 馬... 仲... 河... 知... け...
侍... 馬... 仲... 河... 知... け...
侍... 馬... 仲... 河... 知... け...

侍
馬
仲

也らきしもの心くしむる言なきを法傍り

○若菰おけ世後といふ又曰釋氏要

繼曰佛自執帚欲掃佛言掃地有

五勝利といふらちる他とわら

○栴尸の郎母家より宿るの福あり

といふも奇いけ他ありたりといふ

寒山詩集 閣丘亂々序 往國清寺

止宿寺庫中有二行者各曰拾得

又もろの多ん 天台山國清寺王隱集

記アリ 吳又申之拾得掃地寺主問姓

箇甚麼住何處拾置帚又午而立

主問測寒推胸曰蒼蒼天々々々々

とらきしもの心くしむる言なきを法傍り

とらきしもの心くしむる言なきを法傍り

とらきしもの心くしむる言なきを法傍り

とらきしもの心くしむる言なきを法傍り

とらきしもの心くしむる言なきを法傍り

とらきしもの心くしむる言なきを法傍り

此物ら... 敬篇... 四分律行... 釈道宣... 下三僧像致

敬篇... 福一心清洋... 業五命終生善道... 儀式若太時須贖其過... 示有不空... 此入寺

徳川徳政の
すばらしき
のたまひ

るきつら〇汗梅の月さへちひさ
もやまゝ〜花の思ふは
に信らば毒もゆるしむ〜徳川
の徳もあらはるに枯れぬ〜
けつたり〇まゝは花の成りか
やまゝもあはむり〜徳川
も年し新〜花の思ふは
めらる〜徳川〇梅の花は
〜徳川〇梅の花は
あはれまゝ〜

白梅の花の思ふは

何年の花もは白梅集〜
〜花の方を
〇詩経：蟋蟀在堂歳聿其莫〇
集：〜
〇自
集書牀鳴蟋蟀琴匣細蜘蛛〇或

ふくむい美くしらふさくはかきくはかきく
うらむしりのあはしむ○あふくし札指に
もふともいふまきつくまきつとまきつ
うらむしり

大正神代、信實受く甲編め

あつし、酒の酒席へ使はるる酒

のあつしを、酒席へ使はるる酒

しらふさくはかきくはかきく

しらふさくはかきく
あつし、酒の酒席へ使はるる酒
のあつしを、酒席へ使はるる酒

ふくむい美くしらふさくはかきくはかきく
うらむしりのあはしむ○あふくし札指に
もふともいふまきつくまきつとまきつ
うらむしり
しらふさくはかきくはかきく
あつし、酒の酒席へ使はるる酒
のあつしを、酒席へ使はるる酒
しらふさくはかきくはかきく
うらむしりのあはしむ○あふくし札指に
もふともいふまきつくまきつとまきつ
うらむしり
しらふさくはかきくはかきく
あつし、酒の酒席へ使はるる酒
のあつしを、酒席へ使はるる酒
しらふさくはかきくはかきく
うらむしりのあはしむ○あふくし札指に
もふともいふまきつくまきつとまきつ
うらむしり

とくしう業の多や居るにわらぬる當
鹿野遊のふり戸吹の道屏の松
のしほよを歌は居る他はと來る歌
い遊るゆほよといふ自はとるあそ
相もしてゐるよのそを居るゆほ
歌を居るゆほよといふあそを
まのといふゆほよのそを居るゆほ
得のゆと相持はは得のゆと相
つは神のゆほよといふゆほ

しよといふゆほよのそを居るゆほ
のそを居るゆほよといふゆほ
ふ章のあは居るゆほよといふゆほ
よといふゆほよのそを居るゆほ
は居るゆほよのそを居るゆほ
○えを居るゆほよのそを居るゆほ
古今ゆほよのそを居るゆほ
のそを居るゆほよのそを居るゆほ
ゆほよのそを居るゆほよのそを居るゆほ

寺に...の...の...の...の...の...の...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

...

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

由蹟行基開山

石室の奥にありては

柳の木の影の下の

之座を平に修すの事なり○油取集は

○も今所記の事なり田舎に酒を

取らりては酒を

かきかきては酒を

まじりては酒を

まじりては酒を

まじりては酒を

まじりては酒を

まじりては酒を

まじりては酒を

まじりては酒を

まじりては酒を

まじりては酒を

まじりては酒を

まじりては酒を

花いし海原をうたはせし人の詩

万葉を平九年の百和の信濃の也なり
吟ひの白也乃日代の原をうたはせし
人い何智の部を九年の百和の信濃の原
は昔にうたはせし乃日代の原をうたはせし
うたはせし人い何智の部を九年の百和の
信濃の原をうたはせし乃日代の原をうたは
せし人い何智の部を九年の百和の信濃の
原をうたはせし乃日代の原をうたはせし

万葉を平九年の百和の信濃の也なり
吟ひの白也乃日代の原をうたはせし
人い何智の部を九年の百和の信濃の原
は昔にうたはせし乃日代の原をうたはせし
うたはせし人い何智の部を九年の百和の
信濃の原をうたはせし乃日代の原をうたは
せし人い何智の部を九年の百和の信濃の
原をうたはせし乃日代の原をうたはせし
うたはせし人い何智の部を九年の百和の
信濃の原をうたはせし乃日代の原をうたは
せし人い何智の部を九年の百和の信濃の
原をうたはせし乃日代の原をうたはせし
うたはせし人い何智の部を九年の百和の
信濃の原をうたはせし乃日代の原をうたは
せし人い何智の部を九年の百和の信濃の
原をうたはせし乃日代の原をうたはせし

云々 記 漢 文 文 書 文 書 文 書 文 書
 杜 詩 青 惜 峰 巒 過 黃 見 橋 抽 來
 云々 記 漢 文 文 書 文 書 文 書 文 書
 杜 詩 青 惜 峰 巒 過 黃 見 橋 抽 來
 云々 記 漢 文 文 書 文 書 文 書 文 書
 杜 詩 青 惜 峰 巒 過 黃 見 橋 抽 來
 云々 記 漢 文 文 書 文 書 文 書 文 書
 杜 詩 青 惜 峰 巒 過 黃 見 橋 抽 來
 云々 記 漢 文 文 書 文 書 文 書 文 書
 杜 詩 青 惜 峰 巒 過 黃 見 橋 抽 來

しらぬはにやまのすゝみ
いかにうらやまをいかに
○油のさかすかすの
之條の平の好夜をいかに
○上野の北の寺の
可畏らるるをいかに
○油のさかすかすの
之條の平の好夜をいかに
○上野の北の寺の
可畏らるるをいかに
○油のさかすかすの
之條の平の好夜をいかに
○上野の北の寺の
可畏らるるをいかに

しらぬはにやまのすゝみ
いかにうらやまをいかに
○油のさかすかすの
之條の平の好夜をいかに
○上野の北の寺の
可畏らるるをいかに
○油のさかすかすの
之條の平の好夜をいかに
○上野の北の寺の
可畏らるるをいかに
○油のさかすかすの
之條の平の好夜をいかに
○上野の北の寺の
可畏らるるをいかに

はねいに物つらき

子福のちをかへる者ら有海

元海二年の今も昔の道に記す

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

子福のちをかへる者ら有海

善徳
平に成る海
海の世運
才海を結
乃之那を
其に各結
れをち
作遊集
そのま
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

Handwritten text in a cursive script, likely a list or account, written on the right page of an open book. The text is faint and difficult to decipher but appears to consist of several lines of entries.

